日本の政治は本当に長期間にわたり一党支配が続き、与党も野党も交代に習熟せず、いわばハードランディングの交代だったため、激しく不規則な振動で不安定な政治状況が続きました。しかし、そろそろ政権交代の第二段階に入らなければなりません。

一月十四日の法務大臣就任は、まさに青天の霹靂でした。大阪特捜部の件などで検察が信頼失墜し、この回復が急務でしたし、法曹養成や人権救済、ハーグ条約、またサイバー法案など懸案山積でした。取調べの可視化、つまり取り調べの過程の録音・録画制度の導入が課題となり、法務省と検察庁の全職員の理解と納得を得て、二回も検事総長に直接に指示書を手渡したりしながら、道筋をつけました。

三月十一日の東日本大震災当日は、法務大臣室の仮設ベッドで夜を過ごし、その後は、ガレキ処理の指針策定から戸籍再製、死亡届の扱いなど、法務行政に生じた課題を処理しました。委員会の法案審査の日には、答弁準備のために法務大臣室で日の出を迎えるなど、まさに全力投球、不眠不休でした。

六月二十七日からは環境大臣兼務ですが、ここでも緊急の課題は廃棄物と放射能でした。これまでは、放射性物質の環境への飛散を扱う法律がありませんでした。法制上も安全神話にどっぷりと浸かっていたのです。しかし現実には放射能汚染が広がっており、環境省が処理の最前線に立ち、最後に議員立法で、福島原発事故による放射性瓦礫対処の法律を作りました。原子力安全庁（仮称）も環境省に設置する事になりました。環境省の役割は、今後ますます大きくなると思います。

「五月会だより 2011年10月」NO.122号より

江田五月 75年の軌跡

1941年5月22日
岡山市長岡にて生まれる
（現在の岡山市東区長岡）

1960　60年安保

1967　結婚

1977　社会市民連合発足

1978　社会民主連合発足

1983　衆院選初当選（旧岡山1区）

1985　衆院選連続トップ当選（旧岡山1区）

1986　社民連新代表に

1989　昭和から平成へ

1990　衆院選3連続トップ当選（旧岡山1区）

1992　社民連解体 日本新党へ 江田五月　党副代表に

1993　民主党発足

1994　参院選 当選

1996　政策集団シリウス結成

1998　新進党発足

2004　県知事選敗北

2007　衆院選4連続トップ当選（旧岡山1区）非自民・非共産 8党派による細川内閣 科学技術庁長官に就任

2009　参議院議長就任

2010　参院選 当選

2011　東日本大震災

2014　衆議院解散総選挙 自公に敗北

2015

2016

衆議院解散総選挙
民主党勝利し
政権交代

菅内閣にて
法務大臣
環境大臣を
兼務

安倍内閣、国民の声を無視し
集団的自衛権行使容認の
憲法解釈

政界引退を決意
後継 黒石健太郎
7月、参院選に敗北
岡山県選挙区、衆参とも
自民に独占を許す

引揚げ一家

私が生まれたのは昭和十六年五月二十二日、現在の地名でいえば岡山市長岡である。

父江田三郎と母光子が結婚したのは昭和十年四月一日で、祝賀会を五月一日に開いたところ、メーデーの行進で新郎が検挙され、会が遅れるという時代だった。父は昭和十二年、県会議員に当選したが、十三年二月一日に人民戦線派事件に関係しているとして逮捕された。警察でのタライ回し、未決拘留が長引いた後、二年八月の懲役刑を言い渡され、出獄したのは昭和十五年九月四日だった。

生活に困った父は神戸に移り住んで葬儀屋を始める。私の生まれた時も神戸で暮らしており、母は出産のため岡山に帰っていたわけだ。

夫婦揃って暮らせるようになった直後に長男が誕生したことを、父はたいへん喜んでくれたようだ。しかも五月は、社会主義者にとって特別な意味をもつメーデーの月だ。父は「五月に生まれたので五月（さつき）と命名したところ、大阪の椿繁夫（元国会議員）から、おめでたいことだが、いったい男なのか女なのかと問い合わせてきた。僕は五月は男の月、メーデーの月、男に決まっているではないかと返事を出した」（日本経済新聞社「私の履歴書」）と書いている。

葬儀屋もうまく行かなかった。社会主義者は次々と南方の死地に送られていた。父は生きのびるため、昭和十八年秋、北京へ向かう。当時北京の日本大使館建設課長の深谷克海氏が呼んでくれたのがきっかけだ。

日本軍が中国の農民からソッポを向かれている状況を改善するため、農民運動の経験のある父を呼んだのだという。この深谷氏が私の妻、京子の父である。

母も私を連れて追いかけるように北京へ向かい、中国での暮らしとなる。私自身、神戸時代のことは何も知らない。中国では二、三ヶ所転居したようだが…＜中略＞終戦の時は満四歳、何も記憶にない。家族で渡っていた日本人は帰国が遅れ、しかも十一月には弟の拓也が生まれた。天津から上陸用船艇母艦で佐世保沖に着き、小舟で日本に上陸したのは二十一年四月のことだ。柳行李一つに、リュックサック二個、佐世保で渡された新円千円だけが、一家四人の全財産となってしまっていた。

＜中略＞

引揚げの時、私はリュックの一つでも背負っていたのだろうか。母は拓也につきっきりであったろう。船底のような所に、人がたくさん詰め込まれていたことをおぼえている。私は船内で熱を出してしまったという。伝染病予防がやかましかった時代で、病気の乗客は上陸許可に手間取る。私の発熱を隠すのに、一苦労したらしい。

母光子に抱かれて（満9ヶ月）

「出発のためのメモランダム」より

結婚

刑事裁判修習が終わって弁護修習が始まったばかりの四十二年三月二十六日に結婚した。妻は京子。（中略）父親の深谷克海氏と私の父の関係についてはすでに書いた。三十九年ごろ、私が深谷家へ遊びに行ったのが、付合い始めるきっかけだった。

ように思う。（中略）私も修習生になり、一応の収入もある身になったので結婚ということになった。

森田明君、横路孝弘君、江端崇君らに実行委員になってもらい、一応私たちなりに考えた結婚式にした。仲人の秋山長造参院議員のあさつの後、二人が婚姻届に署名、その後「宣誓」をするのが「式」だった。信じていない神様の前ではなく、参会していただいた人々（会費千円で二百二十人）の前で、結婚の儀式をやろうという考え方だった。

【まず京子から私へ】

長い間、はぐくんできた友情が親しみに、愛に変わり、ここにあなたとの共同生活のスタートラインに立つことができて、仕合わせでいっぱいです。（中略）あなたとなら、どんな苦難の道をも共に乗り越えて、理解し合いながら、常に前進の道を歩んでいける確信と喜びを持ったのでした。（中略）これから二人の共同生活が始まるわけですが、一つお願いがあります。あなたの持っている青年らしい情熱とバイタリティーを家庭のみに費すことなく、どんどん外に発揮して下さい。（後略）

【続いて私から京子へ】

私はかねてから家庭は決して一つの固定的組織ではなく、むしろ、独立した人格を持つ二人が、協力し合って常に人生を創造していく一つのプロセスであり、夫婦は決して同一体ではなく、独立した二つの人格がお互いに影響し合い高め合うものでなければならないと思っていました。（中略）私たちの家庭は尽きることのない愛と信頼の泉にしていきます。（後略）

【さらに二人が参会者へ】

私たち二人は、憲法第二十四条にのっとり、個人の尊厳と両性の平等にもとづき、自由な二人の合意により、ただ今より社会の基礎的単位たる夫婦として、お互いに愛し合い、信じ合い、助け合って、よりよき家庭を築くよう努力することを誓います。

今読み返してみると、我ながら面映ゆい気もする。（中略）しかし結婚なんて、誰もが面映ゆいもののようだ。それなら自己流でやった方がマシだろう。「宣誓」どおりかどうかは別にして、人並みの家庭にはなっているだろう。時には夫婦ゲンカもするが、それほど大事にならないのが私たちの家庭の現状というところだ。

「出発のためのメモランダム」より

「五月会だより 2007年10月」NO.114号より

参院選で歴史的大勝。この選挙結果に相応しい実力が、私たちに本当にあるでしょうか。私の答えはノーです。幸運の女神が最大限に微笑んだ結果なので、これから実力を身に付けることが大切です。浮かれているときではありません。参院選の結果は見事な与野党逆転となりました。＜中略＞臨時国会冒頭の八月七日の本会議で、私が参議院議長に選ばれました。しかも満票。つまり、投票した二百四十人の議員全員が私に投票したのです。自民党は、結党以来初めて、議長を失いました。私は就任挨拶で次のように述べ、議場全体がどよめきに包まれる中、いささか緊張して議長席に着きました。新しい政治の始まりです。

「先の参議院選挙の結果、参議院の構成は大きく変化し、私たちは過去に経験したことのない政治状況に直面しています。今、参議院に寄せる国民の期待は、極めて大きいと思います。もとより微力ですが、公正公平を旨として議院の円滑な運営に努め、本院が国民の期待に応えてその役割と使命を十分に果たすよう、全職員とともに全力を尽くす覚悟です。」

＜中略＞　逆転参議院に何が出来るか、これから問われます。内閣提出法案の否決、野党の議員立法の可決、国政調査権や人事同意権の活用など、身の引き締まる課題が山積しています。初めて経験することも多いでしょう。安倍首相退陣も、無関係ではなかったはずです。肩の力を抜き自然体で、みんなの声にしっかり耳を傾けながら、二院制の妙味を発揮するようがんばります。